

河内幸一郎

チカスケの村の目



河内幸二郎 あたいまつ社



チクスケの村の目白



著者紹介

河内幸一郎（かわち・こういちろう）

1902年新潟県長岡市に生まれる。

県立長岡中学を経て小樽高商中退。越佐新報記者などを経て高校教諭となる。

1948年県立長岡農業高校定時制主事。

現在は長岡市郊外の農村地帯に居住，農業の傍ら農村文化運動に従う。日本農民文学会会員。著書に「村の中からの発言」小説集「嫁よこせ村長様」（たいまつ社）などがある。

「嫁よこせ村長様」で第13回農民文学賞受賞。

現住所 新潟県長岡市町田町862

チクスケの村の日

一九七八年三月一五日第一刷発行

著者 河内幸一郎

発行者 大野 進

発行所 株式会社たいまつ社

東京都新宿区百人町一―二三―一四

〒160 振替 東京四―二四三六二

電話 東京三七一―一五九〇

印刷 山形・中央印刷(株)

定価 一二〇〇円

目次

山姥の村

狐

半ちゃん故里へ

チクスケの村の日

あとがき

5

55

93

127

172

装
丁
井
上
宏

河内幸一郎小説集

チクスケの村の日

山姥の村

——リトル・ジャパン・ザ・アゲロ——

一

国境の村の朝はさわやかである。宿の主人の修蔵は石楠花の植木に如露で水をかけていた。厚い葉が生きものようにきらきら光った。霧が裏山から西の境川の方に、トマト畑や稲の上を流れている。山の村では夏の霧は晴天のさきぶれである。村人が田の水でも見にゆくのか、かげぼうしのように、霧の中を行ったり、こちらに來たり。互いに呼びあう声だけがきこえる。男か女かわからない。うすい影が、だんだん濃くなり、大きくなると、石楠花に水をくれている主人に、

「お早う、今日は天気か、どうかいなあー」

と声をかけてスーッと隣の方に消えてゆく。こちらへくるかと思ったら、急に曲ったりする。

霧の流れは陽が昇ると速くなつて來た。国境の村にも漸く夏が熟してきたのである。

店に村人が買物に來ている。

「霧がおりてのうー。今日は暑くなるかなあ」

「そんだ、豆腐をもらうか、油揚げ三ツとな」

宿の上原修蔵の家は農家だが店がある。酒から豆腐、魚、雨合羽、ゴム手袋、洗剤から菓子、農薬、

肥料、缶詰、ボールペンまで何でも売っている。村人の言葉にも、良輔の故郷津川地方の会津なまりのズウズウ弁とは違う。言葉が軽い。越後も、この国境までくると上方風である。狭い境川の向うの富山県と、こちらの新潟県側の村人達が、こうして霧の中で挨拶し合うのを良輔は想像して見た。

海拔二千九百米、北日本アルプスの白馬岳が大蓮華山となり、北へ落ちて雪倉岳、朝日岳、犬ヶ岳、白鳥山、黒姫山となり、海におちて親不知子不知となる。北では妙高山、火打岳、焼山、雨飾山あまざりがおちて筒石、名立、能生の海に迫る。姫川、早川、能生川、名立川、海川の溪谷に耕地と村が点在し、姫川の上流は信州北安曇郡である。早川谷の入口は狭いが、奥深く七万俵、能生谷は五万俵の米を生産する。越後蒲原平野のように、「山の如くドツシリかまえ、河のように乳を出す」態の穀倉の面影はないが、越後の西端——西頸城郡は、古い歴史と共に、相応の山の幸、海の幸に恵まれて来た。その富山県境の白鳥山が日本海におちこむ途中に、とりついているのが、この山姥の村——上路かみち部落である。

良輔は夜中、ふと目ざめた。小さい電灯の六畳を寝ながら見廻した。津川町の寝なれた部屋だと思つた。もう一度、目をつむつてみた。そして今度は細目にひらき、天井張りのしみのついた木目を見直した。ここは津川でも、糸魚川でもなかった。富山県境の小さな村であつた。

母ひとり、子ひとりで、いつも少年時代から母の傍らに寝た良輔は、覚めた時、傍らに母の寝顔のない時は、自分が故郷を離れていることをたしかめる時であつた。津川の農林学校を卒業して、長岡の試験場の養成所の二年間、今の職場へ来て二年、つまり良輔は寄宿舎か、下宿でひとり寝に慣れたわけである。伯父の富永三郎は、甘ったれ子だ、母の貞枝は子供に過保護だと、家に来る度に、男の

くせに言う。良輔は可愛い子には旅をさせよ、を地で行って、故郷を出てもう四年である。糸魚川の下宿のひとり暮らしも、良輔にはいつも仕事が待っていた。また同じ下宿に改良普及所の技術員仲間、渡部時雄がいて、ひまのある毎に声をかけて来た。仕事先の上路部落の農家組合長の上原修蔵の家に泊るのは今度で四回目だ。前には小学校の先生が下宿していたという。いつもさっぱり片づけてあるのは良輔が出張して泊るのを予期しているようでもある。上路部落は越後の一番西の端の村で小さな境川をへだてて富山県の新川郡である。

いわば国境の村に泊って眠る、話好きの渡部時雄もいない。その時彼はしみじみ「ひとり」を感じさせられる——越後の東の端、福島県境の阿賀野川畔の津川の町に、裁縫しながら、息子といつかいっしょに暮すのを待つ貞枝のひとり居、母と息子が国境の端と端の町と村に張りついて、ここから出てはいけない、と何かに言われているような気がする。寝返りすると、ガラス戸に大きな星が、富山県寄りの林の中にぶらさがりキラキラ光っていた。少し風があるのか、木が動く度に一寸見えなくなったりした。

また、深い眠りにおちいった。

良輔は技術員養成所を卒業と同時に、農業改良普及員の試験にパスした。県職員になって、そして新任地は北アルプスの麓の糸魚川市である。任地がきまった時の貞枝のようこびようは大へんなもので、糸魚川が津川から遠くて、急行列車で乗替して四時間もかかることなど苦にしない。まるで鬼の首をとったとはこのことで、親類縁者、戦前の古い津川農林学校女子部の母の同級生の女友達まで招待して祝った。結婚式でもないのに、母の大はしやぎにびっくりした。息子ひとりの成長のみを頼り

にし、すぐるように、見上げるように待つ母親の気もちが、皿の鮎の塩焼きを、箸でつついている指先に、にじむようである。

「ほら良輔よ、きのう麒麟山の下の常浪川でとれた鮎よ、たんと食べてえ」と言う。今にも人目がなかつたなら、箸ではさんで良輔の口へ入れそうである。母の女友達の庄川昭子は、

「まあ、今日は貞枝さんの最高の日ね」と良輔の近くへよって見上げ、見降ろしたりした。昭子には男の子がなかった。

昔は会津領で、明治十九年に新潟県に編入された東蒲原郡の津川町。阿賀野川沿いで、日本三大河港のひとつ、柔道小説「姿三四郎」のモデル、西郷四郎の出身地と紅葉の名所麒麟山を自慢にしている。東蒲原郡の飯豊山と御神楽山、福島県境の鳥井峠にかこまれた盆地の小さな町である。空も山も木も美しかった。郡内ただ一つの旧制中等学校の農林学校を卒業しても、零細農業のため、卒業生は鹿ノ瀬町の昭和電工会社に勤める者が多かった。山村の兼業農家のほしりである。鹿ノ瀬と新津駅の間に朝夕、阿賀野川沿いに工場通勤列車が走った。醋酸を工場がつくるようになって、水銀が知らず知らず、当時から山紫水明のシンボル阿賀野川に流れ入ったが、水銀の害など戦前戦後語る者はなく、川魚は津川町の名物であった。現金収入の機会が少ないので、小学校教師、鉄道員、町役場吏員は安定した職業で恩給がついて、出世したと考えられた。いわんや県の農業改良普及員とは県庁職員である。「えらい出世の糸口」だと、羨望された。

貞枝は会社勤めの夫と若くして死別して、十アールの畑つくりと一戸の貸家賃と裁縫仕事で、一人息子の良輔を育てたのである。

母が良輔を普及員にさせた、良輔もまたその気になったのは、伯父の富永三郎のすすめである。

貞枝は未亡人暮らしの心細さから実家の富永を頼りにする外ない。

町内費の割当が不公平だとか、町のある男が貞枝のところへ度々お茶のみに来て噂になる。幼い良輔が下痢して熱を出しても富永家に相談に行った。富永はその度に、

「山の中の小さな町だ。他人が失敗するのを喜ぶ人間が多いのだ。くだらぬことに頭を使うな」と言った。

富永三郎は満州で現地召集されて、終戦の時、シベリヤのラーゲル生活二年の末に帰った。しばらく戦争ボケみたい、田畑を耕して桐の木を植えたりしていた。富永も旧軍隊を批判したり、金持ちに冷たい目を向けたが、そんな言動していると、山の町では暮らしがならぬと、気をもち直して戦後発足した町の農業協同組合に勤めた。そして二度目に県の普及員試験にパスした。十年許り新潟市の近くに勤めたが、その後、郷里の普及所に転勤して、一番の古顔である。引揚げ当時、煙草銭に困った富永も、県職員になってから、良輔に絵本を買ってくれたり、新潟市に遊びに連れて行ったり、金のことは口にしないようになった。そして町の新善光寺の斎藤和尚のところへ、謡を習いに通うようになった。

「シベリア帰りも謡の稽古か。いよいよ日本も平和になったなあ」

こういうのは桐苗を植えつつ「異国の丘」を歌った富永三郎を知っている者の言葉である。

落ちつき払った伯父の生活を貞枝は頼もしく思った。そして富永はNHKの地方農事ラジオ放送を担当して、時どき東蒲原郡や津川の農事や習俗をローカル番組で放送した。

謡曲会の世話役とNHKの農事放送は彼を小さな町の地方名士にした。そして富永三郎は、「オレは、自由を崇拝する」などと、言った。こうして生活にアクセントをつけた。

良輔が宿題を怠けたりすると、貞枝は、

「伯父さんのようになるんだ」と叱ったり励ましたりした。

貞枝の仲が県職員になった喜びは祝いに招かれた人びとには、胸に突きとおるように理解された。

彼女は、人生すべてのものが祝福されねば実を結ばぬと考える山里に生まれて、山の津川に育った女である。良輔はどこへ行っても貞枝の分身である。

あれからもう二年たった。実社会の二年間は短いようでもあり永いようでもあった。

良輔は霧が晴れたので、地下足袋をはいて境川の川辺の水田へと、村道を歩いていった。部落をはずれたら空気の密度が変わったようである。

二

良輔の初めての任地糸魚川市は越後の西端——富山県に隣接の西頸城郡の一番大きな町である。明治・大正の文人で、良寛研究を手掛けた相馬御風はこの宮大工の長男として生まれた。北アルプス白馬岳から発する姫川は糸魚川の西で日本海に注いで、県は最近、姫川港をつくった。

昔、出雲の国から大国主命が対馬暖流に乗り逢いに来たと言う奴奈川姫を祭る天津神社がある。姫川は翡翠の産地でもある。糸魚川普及所は水産高校のある能生普及所と合併し、交通不便の全郡が管

轄である。北アルプスから河は西から境川、青海川、姫川、海川。妙高山、火打岳、焼岳から発する早川、能生川、名立川と急流が並び、海は深い。耕地はこれらの川の流域に点在する。海岸の国道に一度出て、各溪谷に入るより仕方がない。

普及所には数台のジープがある。県庁所在地の新潟市から離れているため、独身者の若い普及員の赴任地とされている。「佐渡へとばされるか、糸魚川へやらされるか」と、敬遠されている場所である。

郡内に農業高校がないために、「西頸城郡は農業技術の谷間である」とされ、秀麗な山河、海と共に僻地扱いである。広い蒲原平野と新潟市、長岡市、上越市にコンプレックスをもっている。カーバイト工場で有名な青海町出身の力士黒姫山と、甲子園球場に二回出場の糸魚川商工高校を誇りにしている。「オラが国さ」と、相撲になるとテレビに釘づけになり、黒姫山が土俵に上がると、警察も一時ストップする。青海町の上路部落も黒姫山の取組みになると、上原修蔵の店のテレビの前には野良姿の村民でにぎやかになる。地下足袋姿の良輔もいっしょに黒姫山の相撲振りの批評などする。

「若いに似ず、県庁風を吹かさない」と言われた。無雑作を純粹とみる傾向は上路にもある。山村部落での普及は、あらたまった公民館の講義よりも、村人に溶けこむことが先決と知った。良輔は山村の普及にジープでとび廻った。ジープは親不知の上の国道八号線を国境に向って走った。竹ヶ鼻と先ヶ鼻の間の親不知子不知の海は、はるか断崖の下に白い波をかんて、晴れた日は佐渡ヶ島と能登半島が水平線に見える。左上上に上杉時代のノロシ場「勝山」を越えたと県境の市振に近づく。家が国道の両側に並んでいる。車は軽くバウンドして小さな県境の境川を越えた。ここから上路までは九軒であ

る。富山県に入り、車は境川に沿って溯る。やがて山の斜面にとりついた平部^{たいら}落の下を通り、また境川を渡る、上路橋である。橋を渡るとまた新潟県である。良輔は河原へ降りて顔を洗った。橋詰に大阪ナンバーの車が止った。ロマンス・グレーの品の良い老人が、

「アゲロムラは、ここからどの位で」

「四軒」

と良輔は向うの山のすその森を指した。

「謡の山姥神社はここで……」

「村の真中の、店先に石楠花の植木鉢の並ぶ家でいいよ」

車の中には若い男と、母親らしい渋い和服の女がいた。

良輔が担当する上路^{あげち}部落は戦前、戦後を通じて五十万本の杉苗を植え、明治時代当時木炭五貫俵で一万三千俵以上出した山林の村として知られた。それよりも山姥の村としても全国の能楽界に有名なことを二回目に行った時にわかった。そして、おそくなった時、宿にする農家兼雜貨商——農家組合長上原修蔵が、山姥の解説者であり、ガイドであることも意外であつた。泊つた夜、奥の方から謡の声をきいた。謡と言うとすぐ津川の伯父の顔が浮んでくる。上路部落は明治十年から昭和二十八年まで八十年間も僅か四十八戸三百人前後の村民で、水田二十五ヘクタール、畑が十二ヘクタール位なのに——恐らく自治体としては、瀬戸内海の小島の村以外、日本一の小さな村——ミニミニ村であることに良輔はびつくりした。そして観世流謡曲の山姥の里である。京都・大阪・金沢からよくマイカーがくる理由がわかった。伝説の村、プラス、日本一の小さな村。ここが良輔の仕事の村である不思議